

アメリカ合衆国における女性電信士の誕生

— 南北戦争をはさんで：1850～1890年 —

松田 裕之*

はじめに

1835年、アメリカ合衆国のサミュエル・モールス（Samuel F. Morse）は、アルファベットや数字を短点（^{ドット}・）と長点（^{ダッシュ}—）の組みあわせで表記し、これをパルスに変換して銅・鉄線を伝わせ、目的地に搬送する方式を考案する。遠距離間でのコミュニケーション効率を飛躍的に高めた彼の名は、電信（electric telegraph）の代名詞ともなった¹⁾。

ほどなく電信は商業ベースに乗り、電鍵^{キー}の発する金属音は情報通信時代の幕開けを告げる。それを奏でたのは、電信線の両端に位置する電信局において通信文の送受に従事した電信士（telegrapher, telegraph operator）。世間の人びとは、従来のコミュニケーションに付随した時間と距離の壁を越える魔法の職業に好奇と憧憬のまなざしを送った。

電信士が越えようとしたのはしかし、コミュニケーションにおける時空の壁だけではない。清潔な室内で最新の精密機器を扱う知的でスマートな技術職には、筋肉の強靱さに象徴されるよ

うな男女の肉体的相違が重視されず、また、電信信号に変換されて送受される通信文には「らしさ」なる概念で表される社会的・文化的性差も反映しにくい。

電信士という仕事をもつ性別中立的（gender neutral）な特性は、「肉体的に強く逞しい男性は市場という広い公的空間で家族のために働き、か弱く優しい女性は家庭という狭い私的空間で出産や育児に専念すべし」という「分けられた領域（separate spheres）」規範²⁾の壁をも克服する可能性を秘めていた。事実、電信局においては、男女が同じ機器を操作し、同じ職務をこなし、ときに電信線の両端に分かれて互いに顔も性別も知らぬまま協力しあい、あるいは深夜の暇な時間にモールス符号で機上の「お喋り」や「口喧嘩」にも興じたのである。

男女の役割分担が当然の如く容認された時代には、電信士となった女性たちは、どのように仕事と向きあい、それを全うしていったのか？彼女たちを取り巻く人びとは、その姿にどのような感情を催し、いかなる対応をとったのだろうか？

このノートでは、トーマス・ジェプセン（Thomas Jepsen）やエドウィン・ゲイブラー

*松田 裕之（Hiroyuki MATSUDA）：甲子園大学現代経営学部助教授。関西大学大学院商学研究科博士課程修了。博士（商学）。『ATT労務管理史論』（ミネルヴァ書房、1991年）、『電話時代を拓いた女たち』（日本経済評論社、1996年）、『通信技士の歩いた近代』（日本経済評論社、2004年）など。

hirotanu@koshien.ac.jp.

¹⁾守誠『特許の文明史』新潮選書、1994年、139～150頁。

²⁾この性別分業規範の内実については、川本静子「清く正しく美しく——手引書の中の〈家庭の天使〉像——」松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編『女王陛下の時代』（英国文化の世紀3）研究社出版、1996年、53～85頁。

（Edwin Gabler）による先駆的な業績に目配りしながら、電信という革命的な通信メディアが合衆国初の巨大大事業へと成長を遂げる時期にして、今日まで続く同国の政治経済体制がようやく定まった南北戦争（1861～65年）をはさむ40年間をとりあげ、女性が自らの居場所を新たな通信メディアの職業領域に構築していく過程を描きたい。

I 南北戦争前の電信事業と女性

1844年5月24日、合衆国政府から3万ドルの補助金を受けたモールスは、ワシントン～ボルチモア間の約64キロメートルに絶縁銅線を架け、自らが考案した電気信号によって旧約聖書の一節——「神の御業なり（What hath God wrought）」——を送受した³⁾。

1845年5月15日、彼はマグネチック・テレグラフ・カンパニー（Magnetic Telegraph Company）を設立する。電信の将来性を確信したエイモス・ケンダール（Amos Kendall）も郵政長官の職を辞してモールスとともに新線敷設や電信局開設に奔走、翌46年中頃にはニューヨーク～ボストン間、ニューヨーク～トロント間、フィラデルフィア～ピッツバーグ間にも路線が開通する⁴⁾。折しもカリフォルニア領有をめぐりメキシコとの戦争に突入した合衆国では、AP通信（Associated Press）がいちはやく電信を活用して戦況を逐一報道した結果、電信はその迅速性に対する世評を高めていく⁵⁾。

印刷業のヘンリー・オライリー（Henry O'Rielly）や金融業のハイラム・シブレイ（Hiram Sibley）といった著名な実業家も電信

事業に乗り出すなか⁶⁾、1848年にはペンシルヴァニア州ランカスターからハリスバーグを経てフィラデルフィアに電信線が架設され、西方のオハイオ州シンシナティ、クリーヴランド、ミズーリ州セントルイス、ヴァーモント州バーリントン、ウィスコンシン州ミルウォーキー、さらに南部はルイジアナ州ニューオーリンズへも路線が拡張される。1850年には合衆国内に1万9,300キロメートルの路線——当時、先進イギリスの電信線総延長距離でさえ3,540キロメートル——が架設され、2年後にはその距離が3万7,000キロメートルにおよんだ⁷⁾。

電信線が西部開拓地にまで延び、通信文の送受基地たる電信局が沿線各地に設置されると、電信士に対する需要はたちまち供給を上回り始める。当時の一般的な電信士養成は、いわゆる徒弟制（apprenticeship）であった。「ベテランの肘こそが最高の教師（the only proper place to learn telegraphy is at the elbow of an experienced operator）」という格言もあり⁸⁾、一人前の稼ぎ手（the man）をめざす十代前半から後半の少年たち（boys）は、電報配達員（messenger）や書記（clerk）などをしながら、先輩電信士から電鍵^キの操作を習い覚えた⁹⁾。

³⁾ Edwin Gabler, *The American Telegrapher: A Social History, 1860-1900*, Rutgers University Press, 1988, p.38.

⁷⁾ Vidkun Ulriksson, *The Telegraphers: Their Craft and Their Unions*, Public Affairs Press, 1953, p.2; Alfred D. Chandler, Jr., *The Visible Hand: Managerial Revolution in America Business*, Harvard University Press, 1977, p.197 [鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳『経営者の時代——アメリカ産業における近代企業の成立——』東洋経済新報社, 1976年, 351頁]。

⁸⁾ Thomas C. Jepsen, *My Sisters Telegraphic: Women in the Telegraph Office 1846-1950*, Ohio University Press, 2000, p.46.

⁹⁾ Andrew Carnegie, *The Autobiography of Andrew Carnegie*, Houghton Mifflin, 1920. は、<http://www.wordowner.com/carnegie/2006/03/01> アクセス/にて全文閲覧可能である。以下では、坂西志保訳『カーネギー自伝』中公文庫版, 2002年をもちいる。同書48～78頁は、独立を夢見る少年が電報配達員から電信士に成長していく過程をいきいきと描いている。

³⁾ CQ Ham Radio編集部編『モールス通信』CQ出版社, 1998年, 127～129頁。

⁴⁾ 魚留元章『モールス・キーと電信の世界』CQ出版社, 2005年, 67頁。

⁵⁾ 電信と通信社のつながりについては、Menahem Bloudheim, *News over the Wire: The Telegraph and the Flow of Public Information in America, 1844-1897*, Harvard University Press, 1994.

ところが、見習電信士 (begining) から二級電信士 (second-class) を経て1分当たり30～40語を送受する一級電信士 (first-class) になるには、おおよそ4～5年の職務経験が必要とされる¹⁰⁾。徒弟制に頼ってでは、鰻登りの電信士需要に追いつくのが容易でなかった。

この実情を憂慮した電信事業家のなかには、女性の起用をもくろむ者が現れる。1846年2月21日、設立間もないマグネチック・テレグラフ支配人ポール・ジョージ (Paul George) は、ニューヨーク～ボストン間路線のマサチューセッツ州ローウェル電信局長に、ローウェル婦人労働改革協会 (Lowell Female Labor Reform Association) の創設者としても著名なサラ・バグレイ (Sarah G. Bagley) を据える。社会改革派の雑誌『ボイス・オブ・インダストリー (Voice of Industry)』の編集にも携わった彼女は、電信による情報交換も経験しており、その有用性と将来性を十分に理解していた¹¹⁾。

エリー～ミシガン電信路線の建設者ジョン・スピード (John Speed) も、知人の妻にミシガン州ジャクソンの電信局を切り盛りさせていたが、1849年7月、マグネチック・テレグラフを牛耳るエズラ・コーネル (Ezra Cornell) に妹のフェーブ・コーネル・ウッド (Phoebe Cornell Wood) を同州のアルビオン電信局に採用してはどうかと持ちかける¹²⁾。

スピードはその理由として、訓練された電信士の数が少なく、また路線拡張によって資金も不足している点を強調しつつ、女性が電信業務に必要な資質——例えば、女性の手は男性に比して小さく指も細いために電鍵を叩くの^{キー}に適

しているとされた¹³⁾——を備えていると断言した。

コーネルもその提案を受け入れ、フェーブをアルビオン局に配置する。彼女は電信士になって間もなく、兄エズラ宛の書簡に次のような抱負を綴った。「自分が良い電信士になればいいのに、いつも思っています。でも、正しい指導なしには、その夢は叶いません。良い機器と正しい指導、これが必要です」と¹⁴⁾。

1850年代に入ると、新たな職業機会に対して意欲を燃やす女性の数が漸増していく。ヘレン・プラマー (Helen Plummer) は1850年頃ペンシルヴァニア州グリーンヴィルで電信士になった。弟のP. S. プラマーが電報配達と電線の保守を担当している。ペンシルヴァニア州ウェストチェスターのエマ・ハンター (Emma Hunter) は、1851年にアトランチック・アンド・オハイオ・テレグラフ・カンパニー (Atlantic and Ohio Telegraph Company) に採用された。また、1852年に弱冠14歳でニューハンプシャー州ドーヴァーの電信局に入ったエレン・ラフトン (Ellen Laughton) は優秀な技能を買われ、4年後には同州ポーツマス¹⁵⁾の電信局長にのぼり詰めた¹⁵⁾。

ところで、合衆国では電信創業にさきだつ1830年、メリーランド州ボルチモアからエリコットミルズまでの約24キロメートルを結ぶボルチモア・アンド・オハイオ鉄道 (Baltimore and Ohio Railroad) が営業を開始、長距離輸送の新時代が幕を開ける。路線の総延長距離が1万4,500キロメートルに達した1850年には合衆国政府がイリノイ・セントラル鉄道 (Illinois Central Railroad) に200万エーカーの公有地を無償交付するという前例を作った結果、鉄道

¹⁰⁾ Gabler, *The American Telegrapher*, p.113.

¹¹⁾ バグレイの生涯は, Helena Wright, "Sarah G. Bagley : A Biographical Note." *Labor History*, 20 (summer 1979) pp. 398-413.

¹²⁾ コーネル兄妹の逸話および二人の顔写真^{キー}は, www.albionmich.com/history/history-notebook/R990222html /2006/03/01アクセス/に掲載されている。

¹³⁾ "Did the Telegraph Boader Women's Sphere?" (<http://www.jee-virtuaslmuseum.org/collection/2006/02/27アクセス>).

¹⁴⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.4.

¹⁵⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.5.

敷設は開拓途上の広大な国土に分散する人間と物資の円滑な往来に決定的な意義をもつ事業として一気に加速していく¹⁶⁾。

だが、当時の合衆国の鉄道といえば、いまだ単線運行しかできず、自然条件の変化による遅延や列車同士の衝突事故も往々発生した¹⁷⁾。かかる危険を回避しようと、1851年にエリー鉄道（Erie Railroad）社長ダニエル・マッカラム（Daniel C. McCallum）は同社支配人チャールズ・マイノット（Charles Minot）の発案を受けて、数千キロメートルにわたり分散する業務を一元的に管理する神経組織として電信を援用、単一本部から列車運行を逐一監視すると同時に厳密に時間統制できるシステムを構築する¹⁸⁾。

電信会社にとっても、鉄道会社との連携は朗報となった。道さえない荒野において、唯一線路沿いだけは電信の敷設・保守のための人員を派遣しやすいからだ。くわえて、沿線各駅を中心に町ができ、迅速な情報伝達への要求が一段と高まった結果、鉄道駅が電信事業の拠点として機能していく。「鉄の軌条と鉄の電線がアメリカ開拓の先兵」と謳われる如く、鉄道と電信は手を携えて、^{フロンティア}辺境と呼ばれる地域に住む人びとを互いに身近な存在へと変え始めた。

こうして鉄道駅舎には、電信用継電器、受信用印字装置、断線スイッチ、電鍵、蓄電池箱が常備される¹⁹⁾。そこに配置された電信士は、鉄

道本部の列車運行責任者が打電した運行スケジュール、停車場所と時刻の指定、積荷搭載に関する指示を元文書に変換して専用シートに書き写すと、5フィートほどの棒や硬いロープで作った輪っか（order hoop）に結わいつけ、走行する列車の機関室から半身を乗り出した乗務員に手渡した²⁰⁾。

路線延長が急を告げるなか、駅舎増設にともなう電信士の不足を補うために、鉄道会社も商用電信局（commercial telegraph office）に倣って女性を起用していく。ペンシルヴァニア州ルイスタウンのエリザベス・コグレイ（Elizabeth Cogley）は、ルイスタウン電信局の電報配達員をしながら電信技能を習得した、当時の女性電信士には珍しい叩き上げだ。1856年23歳の時、ルイスタウン局がペンシルヴァニア鉄道（Pennsylvania Railroad）に吸収されたために、そのまま駅舎電信士として勤務することとなった²¹⁾。

同鉄道は、コグレイの仕事ぶりを高く評価し、積極的に女性電信士を駅舎局に配置していく。これを推進したのが、1853年に18歳で自らも電信士として入社したアンドルー・カーネギー（Andrew Carnegie）。後に鉄鋼王として名を馳せた彼は、当時の事情を得意げに回想している。「合衆国の鉄道事業に電信士として若い女性を採用した功績は、私と電信部主任のデヴィッド・マッカーゴー（David McCargo）だという事になっている。それはともかくとして、私たちは各駅の電信局に女性を見習として配置し、必要に応じて局の管理を任せるようにした。こうして養成された女性のなかに、私の従妹マ

¹⁶⁾小澤治郎『アメリカ鉄道業の生成』ミネルヴァ書房、1991年、8～40、200～227頁。

¹⁷⁾単線軌道を共有する列車が山岳地帯を走り抜け、1日に12回近くすれ違うことも稀ではなかった。1841年10月5日には旅客列車同士が走行中に正面衝突、車掌1名と乗客1名が死亡、17名が負傷する惨事がウェスタン鉄道（Western Railroad）で発生している（Chandler, Jr, *The Visible Hand*, p.96〔鳥羽・小林訳『経営者の時代』（上）173～174頁〕）。

¹⁸⁾Chandler, Jr, *The Visible Hand*, p.103〔鳥羽・小林訳『経営者の時代』（上）182～183頁〕。

¹⁹⁾典型的な駅舎局の内装図は、“The Telegraph,” *Harper's New Monthly Magazine*, August 1873, p.332〔<http://cdl.library.cornell.edu/cgi-bin/moa/2006/02/26アクセス/>にて全文閲覧可能〕に掲載。また、各々の機器の働きおよび構造については、Preston Shaffner, *The Telegraph Manual: a complete history and description*

of the semaphoric, electric and magnetic telegraphs of Europe, Asia, Africa, and America, ancient and modern. 1818-1881, Pudney & Russell, 1859〔<http://www.mindspring.com/~tjepsen/2006/02/20アクセス/>にて全文閲覧可能〕が詳しい。

²⁰⁾その時の様子を描いた絵は Jepsen, *My Sisters*, p.17. に掲載。

²¹⁾Jepsen, *My Sisters*, p.6.

リア・ホーガン (Maria Hogan) もいた。彼女はピッツバーグ貨物駅の電信士となり、そこで若い人たちを次々と養成したので、そこはまるで電信士の学校と化したかのようだった」と²²⁾。

ここで創業期に電信士となった女性に共通する特徴をあげると、なによりも新奇な通信技術にいち早く接触し、その価値を認識する機会をもつことができた点であろう。たとえば、フェーブ・ウッドがアルピオン電信局に採用されたきっかけは、実兄のE. コーネルが電信事業に関っていたことによる。E. ハンターもじつは、親戚の照会で、電信士を引き受けた。ペンシルヴァニア州ウェストチェスターの電信路線は、彼女の縁者ユリア・ハンター・ペインター (Uriah Hunter Painter) が敷設したものだ。彼はエマに電信技能も指導した。E. コッグレイにモールス符号の送受法を教えたルイスタウン電信局の電信士チャールズ・スポッツウッド (Charles Spottswood) は、コッグレイ家の下宿人である²³⁾。

彼女たち草分けの活躍もあって、電信および鉄道会社は女性を電信士の貴重な供給源と位置づけていく。ちなみに、1860年国勢調査 (Census) は合衆国内の電信士数を2,000人と計上したが、いまだ性別による分類を行っていないために、女性電信士数を特定するのは困難だ²⁴⁾。ニューヨーク・アンド・ボストン・マグネチック・テレグラフ・カンパニー (New York and Boston Magnetic Telegraph Company) が、当時、北西部地域の管轄局に合計50人前後の女性電信士を配置していたという記録も残されており²⁵⁾、電信・鉄道各社に雇用されている女性

電信士を合計すれば三桁の数字には達したと推測される。

1856年にS. モールスと手を組んだH. シブレイのイニシアチブのもと、65件の電信会社を合併吸収して創設されたウェスタン・ユニオン・テレグラフ・カンパニー (Western Union Telegraph Company) は、1859年に女性を対象とする5カ月間の無料電信教育を開始、受講生にモールス符号の送受技能だけでなく、蓄電池のメンテナンス、報告書の作成、簿記を教授した²⁶⁾。また、1861年にはピッツバーグ女子単科大学 (Pittsburgh Female College) も、女性の電信士職への進出を睨んで電信技能習得講座を開講。同大学教員のひとり「電信士と書記が女性だけで構成される商用局や駅舎局も、いずれありふれた光景になろう」との予想を表明している²⁷⁾。

II 軍用通信網における女性電信士

1861年2月8日、州権の維持、自由貿易の推進、奴隷制の擁護を掲げた南部諸州は、アラバマ州モンゴメリーに各州代表者を召集、独自の憲法を制定するとともに、ジェファースン・デイヴィス (Jefferson Davis) を大統領に選出した。ここにアメリカ合衆国は、新設のアメリカ南部連合国 (Confederated States of America : CSA) と、あくまで旧政体を維持せんとするアメリカ統一連邦国 (United States of America : USA) とに二分されてしまう²⁸⁾。

そして、運命の4月12日、CSA軍がサウスカロライナ州チャールストン湾内の島に築かれ

²²⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.44.

²⁷⁾ *Pittsburgh Evening Chronicle*, August 8, 1861.

²⁸⁾ 南北戦争については、以下の二訳書を参照。B. I. ワイリー著／三浦進訳『南北戦争の歴史』(新アメリカ史叢書5) 南雲堂、1976年；メアリー・ベス・ノートン他著／上杉忍・高橋裕子・中條献・戸田徹子・宇井勢郎子訳『南北戦争から20世紀へ』アメリカの歴史(第3巻) 三省堂、1996年。

²²⁾ 坂西訳『カーネギー自伝』84頁。

²³⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.7.

²⁴⁾ Thomas C. Jepsen, "Women Telegraph Operators in the Civil War" 1997 (<http://www.mindspring.com/~tjepsen.civil-war.htm/2006/02/22>アクセス)。

²⁵⁾ Gabler, *The American Telegrapher*, pp.107-108.

たサムター要塞を砲撃、南北戦争の火蓋が切られた。産業資本主義を軸とした中央集権国家を標榜するUSAは、州の独立性を謳うCSA領内＝南部に侵攻し、これを軍事的に屈服させねばならず、その方途として大規模な軍隊と長い補給線を維持する必要に迫られる²⁹⁾。

幸いにも戦争勃発時には、北東部を基盤とする電信および鉄道業で合併整理が進み、近代的な経営構造を備えた巨大企業が登場していた。USA陸軍省（War Department）は、これらの経営陣に戦争への全面協力を要請する。たとえば、ペンシルヴァニア鉄道からは軍事下での運輸通信網の整備と保守を担う人材として副社長トーマス・スコット（Thomas Scott）とその若き腹心カーネギーが³⁰⁾、またウェスタン・ユニオンからは精緻な暗号システムの創出に長けた総支配人アンソン・ステガー（Anson Stager）が招聘されている³¹⁾。

まず、侵攻戦に必要な大量の兵力動員と兵站輸送には、当時3万2,200キロメートルに達していた既存の鉄道網——南部の鉄道網は1万4,500キロメートル——が大きな威力を発揮。ついで、アブラハム・リンカーン（Abraham Lincoln）大統領の命令で1861年7月4日に着工したネブラスカ州オマハ～西海岸サンフランシスコ間の大陸横断電信線が10月4日に完成、これを基幹線としてUSA政府は広範な軍事行動に有機的連携を与えるべく電信・鉄道各社が所有する電信網を接收、陸軍長官管轄下に軍用電信運営体制を構築していく³²⁾。

そして、このもとで、銃弾が飛び交い砲弾が炸裂する戦場に電信線を架け渡し、暗号通信文の送受にあたったのが、民間の鉄道・電信各社から徴用された電信士たち。彼らは軍属組織たる統一連邦軍用電信団（U. S. Military Telegraph Corps：USMTC）に編入され、簡易電柱、大型蓄電池、継電器、電線ドラム、電信機を搭載した馬車を駆って各方面軍とともに戦場を往来した。ちなみに、南北戦争中に架設された軍用電信線だけでも、2万4,000キロメートルにおよぶ³³⁾。

軍用電信網を支えたのはしかし、USMTCの男性団員だけではない。さきに登場したE・コックグレイは豊かな職務経験を買われて1862年にUSA軍の軍事拠点ハリスバーグに赴任、戦局を左右する通信文の送受に従事している。彼女の死亡記事には「南北戦争時、重要な軍務上の要請に対応すべく招聘された専門家にして信頼できる電信士」とある。E・ハンターもやはり戦争中ウェストチェスターで軍用通信文の送受にあたった。ボルチモア&オハイオ鉄道が設立した電信学校を卒業したアビー・ストラブル（Abbie Struble）は、戦争中も同社の管轄局で働く。彼女は打電音による受信技能を習得した当時としては数少ない電信士であり、「南北戦争時に幾多の英雄的行為を行う」と死亡記事で称えられた³⁴⁾。

USMTCに所属し、砲声轟く激戦地近くで軍事情報の送受にあたった彼女たちのなかで、その活躍を記録されているのが、ミズーリ州ワシ

²⁹⁾ 井出義光『リンカーン——南北分裂の危機に生きて——』清水新書、1984年、150～151頁。

³⁰⁾ 坂西訳『カーネギー自伝』117～127頁。

³¹⁾ David H. Bates, *Lincoln in the Telegraph Office: Recollection of the United States Military Telegraph Corps during the Civil War*, D. Appleton-Century Company, 1939, pp.30-31.

³²⁾ Donald E. Markle, *The Telegraph Goes to War: The Personal Diary of David Homer Bates, Lincoln's Telegraph Operator*, Edmonston Publishing, Inc. 2003, pp.1-22.

³³⁾ “The Civil War Military Telegraph Service” (<http://www.civilwarhome.com/telegraph.html/2006/02/25> アクセス)。USMTCの詳細な研究としては、William R. Plum, *The Military Telegraph during the Civil War in the United States*. 2vols. Jansen, McClurg, 1882; J. E. O'Brien, “Telegraphing in Battle” *The Century*, 38-5, 1889, pp.782-793.

³⁴⁾ “Women Telegraph Operators in the Civil War” [<http://scard.buffinet/pages/tel/pages/women.htm/2006/02/22> アクセス] は、彼女たちの経歴を顔写真入りで紹介している。

ントン郡ミネラルポイント駅配属のルイーザ・ヴォルカー (Louisa Volker) である。

1838年にドイツ移民のエマヌエルとアメリカのヴォルカー夫妻の長女としてミズーリ州セントルイスに生まれた彼女は、1860年に同州ワシントン郡のミネラルポイントに移住、同地の駅舎電信士C・T・バーレット (C.T.Barrett) からモールス符号の送受技能を学び、1863年初めに志願してUSMTCに入った³⁵⁾。

ただし、そのきっかけや動機は判然としない。ミズーリ州は南部奴隷州の連邦離脱に際して、奴隷制を認めつつもUSA側に残ったという経緯から、戦争当初よりUSA派とCSA派が抗争を繰り返す二重政権状態にあった。土地取引や居酒屋経営で富を成したヴォルカー家はかねてから親USA派であり、ルイーザも女性ながら連邦統一に尽力する道を求めて電信士になることを選んだのではないかと³⁶⁾あるいは、後述するその後半生も考慮のうちに含めれば、進取の気性と未知への挑戦を好む性格にも衝き動かされたと推察できる。

1864年9月19日、CSAのミズーリ方面軍司令官スターリング・プライス (Sterling Price) は不利な戦局の打開を狙い、1万2,000人の軍隊を率いてアーカンソー州を横切りミズーリ州への侵攻を開始する。標的のひとつパイロットノップは、セントルイスの南約137キロメートルの地点に位置し、1850年代末に敷設されたセントルイス・アンド・アイアン・マウンテン鉄道 (St. Louis and Iron Mountain Railroad) 南端の終着駅であることにくわえて、地区防衛に不可欠なUSA軍の兵站基地と製鉄工場を抱えていた³⁷⁾。

このプライス侵攻に際して、ルイーザはUS

MTCの一員にふさわしい奮闘を見せた。すなわち、「ミネラルポイントの北6マイル (9.7キロメートル) にある鉄道駅パイロットノップは南軍騎兵の攻撃を受けた。ヴォルカー嬢はかねてから敵の襲来を確信しており、パイロットノップに逐一戦況を打電していた。そして、切断された電線を修理工が夜陰に紛れて修復すると、彼女はセントルイスから61マイル (98キロメートル)、ノップの北25マイル (40キロメートル) の地点にあるミネラルポイントへの敵襲を予測して一晩中眠ることなく電信機の側に座っていた。(中略) ポイントで業務を遂行しているヴォルカー嬢は2昼夜にわたり電信機を操作し続け、アイアンデールから救援に駆けつけた電信士によってようやく激務から解放された」と³⁸⁾。

パイロットノップ攻防戦で無事任務を果たしたルイーザは、休む間もなくCSA軍残党による略奪からヴォルカー家の地所を守ろうと、妹とともに自邸に立て籠もる。ふたたび記録を引こう。「ヴォルカー嬢と妹は父親の邸宅が破壊されるのを防ごうと居残った。彼女はみずからが電信士であった痕跡を全て隠し、暴力から自分と妹を守るという強い決意をもって拳銃をポケットに忍ばせた。窓から小さな村の様子を眺めていると、ぼろぼろで痩せ飢えた姿の南部連合の騎兵が現れて、あちこちで略奪はいうにおよばず、食物を漁り始めた。裸足の兵さえおり、みんな安物の綾織りポンチョを羽織り、帽子がキャップを被って、何人かは南軍将校の制服を着て、鞍にありとあらゆる略奪品をぶらさげていた。ヴォルカー邸にも彼らは押し入り、毛布や衣服を盗んで食糧を食った。ヴォルカー嬢は妹とともに銃を構えて一室に身を潜めていた。やがて敵軍は全て北へと去り、人の絶えた村を支配する静寂は恐ろしい敵軍の存在よりも遙か

³⁵⁾ Plum, *The Military Telegraph during the Civil War*, vol. I, p.345.

^{36), 37)} Jepsen, "Women Telegraph Operators in the Civil War" 1997.

^{38), 39)} Plum, *The Military Telegraph during the Civil War*, vol. II, pp.218-219.

に耐え難いものだった。ふたりの若い婦人は、拳銃を手にしたまま息を殺し耳をそばだて、破壊し尽くされた邸宅の中央に立ち尽くしていた」³⁹⁾。

この武勇伝のあとも、彼女はミネラルポイント駅詰の電信士として軍務に服した。やがて南北戦争の終結が正式に宣言され、アメリカ合衆国が統一連邦体制を回復した1週間後の1865年5月17日、彼女はミズーリ州ポートジョの法律家にして土木技師のトーマス・ハンロン・マックラインド（Thomas Hanlon Macklind）と結婚。なお、トーマスは南北戦争が始まるや、ポートジョの親USA派とともにミズーリ州義勇軍第12ミズーリ騎兵隊（Twelfth Missouri Cavalry of the Missouri State Militia）を組織した経歴をもつ⁴⁰⁾。

結婚してからもルイーザの気性は変わらなかった。電信業務からは離れたものの、すぐに新たな職域に関心を抱く。それは速記業務（stenography）。通信文を迅速かつ正確に書き写すという電信業務の経験も手伝って、ルイーザは速記業務に魅力を感じたようだ。整った筆跡、高度な識字力、優れた筆記技能は、電信士だけでなく、速記者にとっても必須の適性となる。彼女は自ら速記を習得しただけでなく、セントルイスに住む貧しい少女たちに無料でそれを指導した。1895年に58歳となったルイーザは、セントルイスに設立された女子医療単科大学（Women's Medical College）を卒業、医療実践免許6,720号も取得している⁴¹⁾。

そして、1897年1月26日制定の「軍用電信士支援救済法（An Act for the Relief of Telegraph Operators who served in the War of the Rebellion）」によって名誉奉仕賞を授与さ

れ、若き頃の愛国的行為を称えられた。USMTCの女性団員でこれを受賞した者は、ルイーザを含めてふたりしかいない。1905年5月21日、潰瘍の悪化による老衰のため逝去、享年68歳⁴²⁾。

南北戦争の4年間、医療、行政、教育などの分野を中心に女性の職場進出が促された⁴³⁾。従軍看護婦として戦地に赴き献身的な活躍を見せた女性ばかりか、小銃や拳銃を手に男性とともに実戦を経験し、あるいは敵地において諜報活動に従事した女性の存在も判明している⁴⁴⁾。

軍事機能の重要な一翼を担った電信の世界でも、コググレイ、ハンター、ストラベルやヴォルカーの如くUSMTCに入団した女性もいたし、男性電信士が軍役に徴集された後、民間電信局には以前にも増して女性電信士の姿が目立つようになった。また、USA側に比較して電信網が未整備だったCSA側のジョージア、サウスカロライナ、ルイジアナ、フロリダ、アラバマ各州でも、少なからぬ女性が銃後の守りとして電信局に勤務したのである⁴⁵⁾。

⁴²⁾南北戦争中、USA軍用電信士の罹病・負傷・戦死・捕虜は300人以上にのぼる。だが、彼らは正規兵ではなく、軍属の民間人にすぎなかった。その結果、戦後しばらくのあいだ合衆国政府は、彼らおよび彼らの遺族に対してなんらの保障も行わなかった（Plum, *The Military Telegraph during the Civil War*, vol. II, pp.352-358.）。そこで、戦争中陸軍省電信局に勤務したデヴィッド・ベイツが議会に軍用電信士の働きに報いる法案制定を粘り強く要請し、同法が上院法案319号として可決される（D. Markle, *The Telegraph Goes to War*, p.24.）。ルイーザ・ヴォルカーのほか同法のもとで名誉奉仕賞を受けた女性は、ニューヨーク州ノーウィッチのマリー・E・スミス・バエル（Mary E. Smith Buell）である（Jepsen, “Women Telegraph Operators in the Civil War” 1997.）。

⁴³⁾Doris Weatherford, *Milestones : A Chronology of American Women's History*, Facts On File, Inc, 1997, pp.94-109.

⁴⁴⁾大井浩二『アメリカのジャンヌ・ダルクたち —— 南北戦争とジェンダー —— 』英宝社、2005年。

⁴⁵⁾Jepsen, *My Sisters*, p.55. CSA側の軍用電信については、Plum, *The Military Telegraph during the Civil War*, vol. II, pp.118-121.

⁴⁰⁾Plum, *The Military Telegraph during the Civil War*, vol. I, p.345.

⁴¹⁾Jepsen, “Women Telegraph Operators in the Civil War” 1997.

Ⅲ 女性電信士のステータスをめぐって

すでに南北戦争前から電信の世界に足場を築いていた女性は、戦時中男性に代わって民間ならびに軍用電信網の維持に貢献したことで、専門技能者たる自覚を深めた。

やがて、戦争の帰趨が明らかとなり、軍役を解かれた男性が職場復帰するなか、電信士職の在り方をめぐる男女間の意識対立が先鋭化していく。電信業務に携わる男女は、自らの仕事に必要な高度な知的能力を駆使して、互いに正しいと信ずる見解を真っ向から戦わせ始めた。

その舞台を提供したのが、南北戦争中の1863年に男性電信士の互助組織として結成された全国電信労働組合 (National Telegraphic Union : NTU)⁴⁶⁾ の機関誌『テレグラファー (Telegrapher)』⁴⁷⁾。

論争の口火は、『スザンナ (Susannah)』を名乗る女性が切った。彼女は1864年10月31日号に投書し、「若い女性が、NTUに加入している男性と結婚しなくても、NTUに加入できるのでしょか？ 女性電信士の数が急速に増えていることはご存じでしょう。なのに、なぜ私たち女性が貴方たち男性の組織の利益から除外されるのか、その理由がわからないのです」と問い質す。

編集長ルイス・H・スミス (Lewis H. Smith) は、同号で「女性が組合員になれない理由などありません」と返答したが、『スパーク (Spark)』というペンネームの男性電信士は1864年11月28日号で、「通信文の送受に際して起こる間違い (脱字、短点と長点の不正確な間隔、乱雑な筆跡、横柄な業務態度) の大部分

は女性電信士による (ために)、男性組合員の胸中には、女性を雇うことへの偏見 (prejudice) が存在しています」と、女性の職務能力に対する疑念を表明する。

ただちに反論が寄せられた。1864年12月26日号は、『134』、つまり「電鍵を叩くのは誰? (Who is at the key?)」という^{スラング}隠語をペンネームとする女性の投書を掲載。『134』曰く、『『偏見』という語は、早とちり、中傷、あてつけを意味する、たんなる世迷いごとにすぎません。誤りの大部分が女性によるものだなんて、貴方は確証をもっていえますか? わたしたちの勤務する電信局には、職務適性で劣る女性などいません。貴方はこのあいだの意見を是非撤回すべきです』と。

彼女のペンネーム (「電鍵を叩くのは誰?」) 自体、性別にもとづいた職務能力の優劣論への警句といえる。通信文の送受においては、それを行う電信士が回線のもう一方に陣取る電信士の性別を知る術がない。「モールス符号の打ち方の強弱やリズムによって男女を判別できる」という意見もあったが⁴⁸⁾、逆に男性とばかり思い込んでいた相手方の電信士がじつは女性だったことを知って驚く男性電信士はまことに多数におよんだ。

論争を過熱させたのは、1864年12月26日号に掲載された《T. A》からの投稿である。彼は当時ウェスタン・ユニオンと並ぶ業界の雄アメリカン・テレグラフ・カンパニー (American Telegraph Company) の主任技師マーシャル・レファーツ (Marshall Lefferts) が女性電信士の無料訓練課程を開設し、管轄各局に修了生を配置しようともくろんだ事実を槍玉にあげ、「女性は男性よりもえてして低い賃金で働くで

⁴⁶⁾Ulriksson, *The Telegraphers*, pp.15-20.

⁴⁷⁾以下、*Telegrapher*からの引用は、Jepsen, “Women Telegraph Operators in the Civil War” およびJepsen, “My Sisters Telegraphic : The Letters of Nineteenth-Century Women Telegraphers” [http://www.mindspring.com/~tjepsen/WKU.htm/2006/02/22 アクセス] からとする。

⁴⁸⁾この点については、石井香江『『モールス文化』の中のジェンダー —— 日本の電信技手における『技能』の形成と変容 —— 』〔武庫川女子大学『生活美学研究所紀要』第15号, 2005年〕66~68頁。

しょうから、彼女たちは最終的に電信局から男性を排除しかねません」と主張した。

たしかに、地域や会社によって若干の違いはあるが、電信士職に就いた男女間には明確な賃金格差が存在した。時代が少し下って1870年代の記録によると、月額15～45ドルを支給される見習電信士の段階では男女にさしたる賃金差はなかったが、男性のほうが二級電信士の最高賃金月額60ドルに到達するまでの期間が短く、また一級電信士の場合に男性が月額80～85ドルの賃金を支給されるのに対して、女性は最高75ドルしか支給されなかった⁴⁹⁾。これに関連しては、J. スピードがE. コーネルに女性電信士の採用を提案した際に「路線拡張による資金不足」を動機のひとつにあげていた事実を想起せねばならない。

つまり、電信・鉄道会社が人件費削減の一方途として女性を電信士職に起用したのは、否定できぬ事実といえる。《T. A.》は、まさにこの事実を男性電信士の地位に対する女性の脅威と捉えて、「電信士が来るべき『苦難の時』から自らを守るために為すべきことは、全国組合から女性を締め出すとともに、可能な限り電線からも遠ざけることです」と断言したのである。

1865年2月27日号においてペンネーム《マグネッタ (Magnetta)》は、《T. A.》を偽善的にして自己中心的な輩と非難する。曰く、「私はほんとうに19世紀に住んでいるのだろうか？あるいは、野蛮時代に逆戻りしたのではないか？そして、自己中心の神に服従せねばならないのではないか？……そう自問しました。レファーツ將軍は私たちに救いの手を差し伸べ、私たちが辛抱さえすれば、最も優れた男性と同等であると証明できる機会を与えてくれました。『苦難の時』から身を守る。女性を労組からも電線からも締め出す』ですって！貴方！ご自分の意見

をもう一度心から考え直さない！」と。

女性側からの手厳しい批判を受けて、同年9月にシカゴで開催されたNTU大会では、女性加入の承認案が提出されたが、これはボストン代表J. W. ストローヴァー (J. W. Stover) の演説によっていとまたやすく却下される。彼は「女性が電信士という職に値する」どころか、逆に女性が電信士として無能と知った電信局長たちが「彼女たちを追い出しつつある」と指摘した。

当然、女性電信士は不満の意を表明する。M・E・ルイス夫人 (Mrs. M. E. Lewis) は同年11月26日付ニューヨーク・タイムズ (New York Times) に投書、「その職業に値し、その職業を輝かせる女性電信士がいる」と前置きして、「局長たちは『女性を排除』する代わりに、女性への扉をさらに大きく開くべきであり、多くの場合、男性よりも女性のほうが一段と有能であると誉め称えるべきである」と切り返す。

ストローヴァーも負けじと、1866年1月15日発行の『テレグラファー』で、電信業務は「女性を余りに多くの窮地へと追い込み、女性らしい女性が知ることを期待されていないような物事への理解を要求」するもので、成功している女性電信士は「女性らしくない」という烙印を押される、と反論。

実際、電信士同士が回線をつうじて喧嘩するのは日常茶飯事、ときに決闘におよぶことさえあった。そのために、1870年のウェスタン・ユニオン規則集は「回線での喧嘩は厳禁」と定めている。また、見習電信士では到底処理しきれぬほどの電文を一度に送信する《塩撒き (salting)》も、通過儀礼的な新人いじめとして頻繁に行われていた⁵⁰⁾。

ルイス夫人は続く2月1日号で、電信業務が「女性を窮地へ誘う」という意見に対して次の

⁴⁹⁾Jepsen, *My Sisters*, p.62.

⁵⁰⁾Gabler, *The American Telegrapher*, pp.81-83.

ように応じた。「仕事というものが余りにも汚い世界で、女性がそれに関わるべきでないと論じるのは不穏当です。例えていうと、政治の世界が余りにも汚いので、聖職者はなにもすべきではないというのと同じでしょう。潔癖な人びとを仕事や政治の世界から締め出すのは誤りです。反対に、汚いを排除しようとする潔癖な人びとの努力こそ、支援されるべきでしょう」と⁵¹⁾。

また、ルイス夫人は、女性電信士が男性に伍して職務をこなす姿を「女性らしくない」とするストーヴァーの見方に対して、「女性が家事以外の仕事を理解していないという思い込みは、男性の誤りです」と喝破したうえで、「いまや、良き主婦の資質こそが、良き電信士の資質——辛抱強さ、誠実さ、多くの見落とされがちな些細な事柄に対する慎重な注意力——なのです。もし女性がこれらの資質において平均的な男性よりも劣るなら、私は間違っているでしょうが……」と修正を迫る。すなわち、彼女は電信士を性別中立的な仕事と捉えず、さらに一歩進んで、それを女性により適した仕事なりと主張したのである⁵²⁾。

たしかに「分けられた領域」規範に照らせば、「辛抱強さ、誠実さ、多くの見落とされがちな些細な事に対する慎重な注意力」は、家庭で家

事・育児を担当する女性にこそ必要な資質と目されてきた。ルイス夫人は、男女の役割分担に関する伝統的な価値観を逆手に取って、電信士職に対してもつ女性の——男性よりも——優れた資質を明瞭に浮かびあがらせようとした⁵³⁾。

以上のように、南北戦争の末期より労組機関誌において電信士たる存在意義をめぐる男性と意見をぶつけあうなかで、女性は家庭という私的空間に自分たちを囲い込んできた「分けられた領域」規範の壁と対峙し、職業という公的空間からの締め出しをはかる男性側の旧態依然とした言い分を論破しながら、新たな技術職における自己のステータスを確たるものとしていく。

IV 電信拡張期における女性電信士

1870年以降、電信士という新たな技術職域における女性の挑戦は実を結び始める。北東部大都市の商用局から鉄道駅のワンマン局に至るまで、電信業務に携わる女性数は表-1に示すように漸増を遂げた⁵⁴⁾。

戦勝に勢いづく北東部／中部大西洋岸では、軍用電信網の管理運営に絶大な貢献を行ったウェスタン・ユニオンが、1866年に合衆国政府から2万2,500キロメートルもの管轄路線を払い下けられて一躍事業規模を拡大する。そして、アメリカン・テレグラフをはじめとする競合企業を軍門に下すとともに、それらの保有する特許

⁵¹⁾女性電信士の草分けE. ハンターの起用にあたっては、職場モラルの改善が企業側の動機のひとつとしてあったようだ。男性電信士には一種の職人気質があり、自分の沽券を守り面子を保つために、同僚や後輩、あるいは管理者に往々威圧的な姿勢で対峙した。「分けられた領域」規範に照らすと、女性のほうが男性よりも道徳観や倫理観に優れ、従順で礼儀作法もわきままてっていると通念されているために、女性の配置によって対立的で殺伐とした局内の空気を改めることが期待されたということであろう (Jepsen, *My Sisters*, p.101.)。

⁵²⁾たとえば、ペンシルヴァニア鉄道で女性電信士の採用を進めたカーネギーも、「私たちの経験からいうと、若い女性は、男子青年よりも信頼が置けるということであった。女性が進出した新しい職場はたくさんあるが、その中でも最も女性に適しているものは電信事業であると思う」と述べている (坂西訳『カーネギー自伝』84～85頁)。

⁵³⁾「分けられた領域」規範のもとで家事や育児に必要とされていた女性の資質が、逆に女性の家庭外就業の可能性を拓いていく、いわゆる「ねじれ」現象については、松田裕之『電話時代を拓いた女たち——交換手のアメリカ史——』日本経済評論社、47～49頁。

⁵⁴⁾Jepsen, *My Sisters*, p.53. 1870年国勢調査において初めて各職業の性別構成が明らかとなった。とはいえ、その数値はいささか控えめである。1883年、電信士友愛会 (Brotherhood of Telegraphers) 幹部ユージン・オコンナー (Eugene J. O'Connor,) は、上院小委員会で、電信士の20パーセントが女性であると証言。同年、ウェスタン・ユニオン支配人ウォルター・ハムストーン (Walter C. Humstone) は電信士に占める女性の比率を25パーセントと述べている (Jepsen, "My Sisters Telegraphic")。

表－１ 地域別電信士数の推移（1870～1890年）

年度	北部／中部大西洋岸		南部		中西部		大草原地帯／極西部		合衆国全体	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1870	4,510	277	647	1	2,115	45	689	32	7,961	355
1880	11,217	785	1,765	43	6,494	236	2,202	67	21,678	1,131
1890	18,791	5,009	4,704	442	13,192	1,912	7,053	1,031	43,740	8,748

権をも手中に収めて、60年代末には事実上の独占企業として商用電信業界に君臨した。同社保有回線の総延長距離は14万4,000キロメートルにもおよび、各州にあまねく管轄局をもち、「全米的」という意味では当時の産業界で唯一の存在となる⁵⁵⁾。

既述のように、同社は1856年から独自の養成機関を設立して女性電信士の育成に力を注いでいたが、1871年度実績を眺めると、電信講座受講志願者275人中受講許可者96人、そのうち15人が任意退学、4人が強制退学となっている。修了者55人のうち40人は配置が決定、12人が欠員待ちであった。修了者の処遇については、まず地方支局に配属され、そこで経験を積んで技能を磨いた者はニューヨーク市マンハッタン区ブロードウェイ195番地の本局に採用された。設立から20年間に、この養成講座は年間平均80人前後の女性をウェスタン・ユニオンの本局あるいは管轄支局に送り出している⁵⁶⁾。

ついで、南北戦争後、急ピッチで開拓が進んだ中西部および大草原地帯／極西部では、1869年に完成した大陸横断鉄道幹線とそこから延びる支線に沿って電信路線も拡張の一途を辿り、駅舎局数が急増した。そこでは、通信文の送受はいうにおよばず、機器類の維持管理や帳簿記載にくわえて、列車への指令書の手渡し、乗車券の販売などありとあらゆる業務が女性電信士の手に委ねられる。

表－１を一瞥しても、これら地域の電信士中に占める女性の比率は北東部／中部大西洋岸や南部に比較して高い。開拓地の苛酷な環境——嵐や早魃、狼や灰色熊の襲来、原住民や盗賊との戦い、土地や水をめぐる紛争——のもとでは、「分けられた領域」規範など論外の贅沢。そこはあらゆる人間が生存のために全力を尽くすジェンダー解放区にほかならず、女性が非伝統的な役割——医者や教師、記者やジャーナリスト、郵便局長、居酒屋や商店の経営者——を積極的に演じることも往々必要とされたのである⁵⁷⁾。

ユタ州ソルトレイクシティ近くのドライクリークでデザート・テレグラフ・カンパニー（Desert Telegraph Company）管轄局の電信士をしていたマリー・エレン・ラヴ（Mary Ellen Love）は、1870年にベンジャミン・バー・ネフ（Benjamin Barr Neff）と結婚、そのあと家事と仕事を両立させるために電信装置一式を自宅に移設して電信線を引き込んだ。ネフ家はこの町の電信局に早変わりする。逆に子供が生まれたあと、マリーは地域で唯一の熟練電信士たる腕前を買われて、ユタ・セントラル鉄道（Utah Central Railroad）サンディ駅の電信士を任された。彼女は毎日子供を局に同伴することを会社側に認めさせる。今度は電信局が家庭になり代わり、育児空間としての機能を果た

⁵⁵⁾ ウェスタン・ユニオンの沿革については、Robert L. Thompson, *Wiring a Continent: The History of the Telegraph Industry in the United States, 1832-1866*, Princeton University Press, 1947 (reprinted by Arno Press "Technology and Society," 1972).

⁵⁶⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.46.

⁵⁷⁾ 松尾式之「解説」〔ジョアナ・ストラットン著／井尾祥子・当麻英子訳『バイオニア・ウーマン——女たちの西部開拓史——』講談社学術文庫版、2003年〕417～418頁。また、開拓地域の苛酷な生活の実態については、オットー・L・ベットマン著／山越邦夫・斉藤美加・佐藤美保・千代田友久・堀内正子訳『目で見る金びか時代の民衆生活——古き良き時代の悲惨な事情——』草風館、1999年、68～92頁。

したわけである⁵⁸⁾。

かかる女性電信士の姿はしばしば、郷愁をそそる言葉で描写された。「遥かなる西部の平原、鉄道駅のあるところでは、旅行者は必ずといっていいほど、窓に掛けられたレースやモスリンの可愛いカーテン、吊り下げられた鳥籠、窓枠に並べられたいくつもの花の植木鉢などを目にするだろう。そこでもし、汽車が止まっている時に外を眺めてみれば、聡明そうで、小奇麗な恰好をした白いエプロン姿の若い女性が、汽車の乗客をなかば嬉しそうに、なかば悲しそうに眺めているのに気づくだろう。こうした女性こそが駅舎の電信士なのである」と⁵⁹⁾。

最後に保守的風土の南部においても、戦時中少なからぬ女性が銃後の守りとして電信局に勤務する。戦後の再建期における経済的な沈滞と、奴隷解放や戦死・負傷による男性労働力の減少も手伝い、南部女性も稼ぎ手として家庭外で働くことを余儀なくされた。そうした事情もあり、南部でも女性を対象とした電信技能教習所が登場する。そのひとつ、アラバマ州モンテパローに設立されたアラバマ女子工芸学校 (Alabama Polytechnic Institute for Girls) の電信技術科は、クイーン・アンド・クレセント鉄道 (Queen and Crescent Railroad) をはじめとして南部の駅舎電信局や商用電信局に多数修了生を送り込んだ⁶⁰⁾。

1880年代から世紀転換期にかけて電信事業が未曾有の拡張を遂げる過程で、女性は男性の穴埋め要員の域を脱し、電鍵を叩いて情報通信革命の音色を全米各地に響かせるミューズとなる。ちなみに、この時期に電信士となった女性の特徴は、暮らし向きが比較的ましな工場労働者あるいは鉄道労働者の家庭で育った10代後半から

20代前半の者や、父親・夫を亡くしたために家計を支えるべく働かざるをえなくなった中流階層の者が多かったことであろう。とりわけ後者からは、優れた識字力と学習能力を武器に、電信士としての腕を磨きながら、より高い処遇を求めて局から局を渡り歩く者さえ現われた⁶¹⁾。

電信士の性別論争の舞台となった『テレグラフファー』は、女性の攻勢の前に白旗を掲げる。1875年3月27日号には次の文章が掲載された。「女性電信士の存在はすでに動かし難い事実にはかならず、『女性の領域』に関する見解がいかなるものであろうとも、私たちはいまある状況を受け容れて、女性電信士の存在意義に疑義を呈する見解を却下する」と⁶²⁾。白いブラウスの袖に濃紺の腕貫を付けた女性が町の郵便局や雑貨店の一隅に設けられた電信局で電鍵を叩いたり、列車指令書を付けた棒や縄の輪っかをかざして鉄道駅のホームに立つ姿は、合衆国のあちこちでお馴染みとなったのである⁶³⁾。

おわりに

南北戦争終結からの約四半世紀は、合衆国全体の趨勢に照らせば、下表のように女性労働者の漸増期にあたる⁶⁴⁾。だが、その実情を眺めれ

⁶¹⁾ Gabler, *The American Telegrapher*, p.108, pp.121-130.

⁶²⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.101.

⁶³⁾ 婦人キリスト教禁酒同盟 (Women's Christian Temperance Union) 会長にして女権擁護の論客フランセス・ウィラード (Frances Willard) も、1897年に、「若い女性が商用局や駅舎局の電信機を操作するのが、余りにありふれた光景なので、それを目撃しても驚く人などいません」と述べている (Jepsen, *My Sisters*, p.1.)。

⁶⁴⁾ ミズーリ、モンタナ、ネブラスカ、ネヴァダ、ニューハンプシャー、ニュージャージー、ニューメキシコ、ニューヨーク、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ノースダコタ、サウスダコタ、オハイオ、オクラホマ、オレゴン、ペンシルヴァニア、ロードアイランド、テネシー、テキサス、ユタ、ヴァーモント、ヴァージニア、ウェストヴァージニア、ワシントン、ウィスコンシン、ワイオミングの26州の総計値 (U.S. Department of Commerce. Bureau of Census, *Historical Statistics of the United States Colonial Times to 1970*, 1975, pp.130-131.)。

⁵⁸⁾ Jepsen, *My Sisters*, pp.75-76.

⁵⁹⁾ "Women as Telegraph Operators," *Electrical World*, June 26, 1886, P.296.

⁶⁰⁾ Jepsen, *My Sisters*, p.56.

ば、1890年時点で女性の家庭外就業者の60パーセント近くが女中職（domestic servant）、その他が教員か商店員、あるいは製造工場の不熟練補助労働に従事していたにすぎない。

表－2 女性労働者数の推移（1870～1900年）

年度	総計	男性（パーセント）	女性（パーセント）
1870	6,700,600	5,752,500 (85.9)	948,100 (14.1)
1880	9,185,600	7,801,400 (84.9)	1,384,200 (15.1)
1890	12,262,000	10,191,500 (83.1)	2,070,500 (16.9)
1900	15,764,400	12,948,200 (82.1)	2,816,200 (17.9)

しかも、彼女たちの90パーセントは22歳前後の未婚にして家族と同居する、いわば自活の必要度が低い者、残り10パーセントほどの既婚女性の場合はその大半が父や夫などの稼ぎ手を亡くすか、病気の夫や老親・幼子の扶養に迫られてのやむなき選択であった⁶⁵⁾。

こうした状況のなかで、電信士という新たな技術職が女性に門戸を開いたことは、まことに画期的な出来事といえる。電信事業の現場において、女性は男性と同じ内容の、基幹業務を全うしていたのだから。時代が下った1907年、ペンシルヴェニア州ピッツバーグの金属業、洗濯業、衣服縫製業、ガラス製造業、印刷製本業など27業種に勤務する14～25歳の女性労働者2万2,185人を対象に行った週給調査によると、60パーセントが7ドル以下、20パーセントが7～8ドル、20パーセントが8ドル以上に分類されたが、電信士の場合、対象となった90人全員が8ドル以上を稼得している⁶⁶⁾。技能に磨きをかければ昇給あるいは昇進も可能な電信士は、たしかに女性たちにとって、従来開放されてきた職種にはない魅力を備えていた。

かくて女性電信士は、ある時は互いに距離を

隔てた地域社会を結びつけ、ある時は銃弾飛び交う戦場で軍事情報の送受に命を賭し、またある時は列車走行の安全を確保するためにモールス符号の送受に明け暮れる。

だが、新たな通信技術の分野に女性の職域を切り拓いた彼女たちの活躍は、こんにちまで余り語られることがなかった。

その原因として、まず史料上の制約を指摘できる。女性が電信士という新たな技術職に進出した19世紀後半の合衆国には、人びとの意識のなかに「分けられた領域」規範が根強くあり、女性を職場という公的空間で働く一人前の——男性と同等の——存在と捉える観念が希薄だった。電信関連の業界誌や労組機関誌、地方新聞の死亡記事に、彼女たちの活動や主張、あるいは経歴が紹介されることはあったが、国勢調査や電信・鉄道各社の人事記録には、電信士も含めて女性従業員に関する詳細な情報が甚だ少ないのである⁶⁷⁾。

ついで、考慮に入れるべきは、情報通信技術（information communication technology）のたゆみなき革新である。たしかに、「今日のコンピュータは、桁外れの記憶力を備え、瞬間的な送受信ができるようになった電信という以上のものではないし、電信とコンピュータのあいだに発明されてきたあらゆるコミュニケーション手段は、いずれも電信が最初に踏み出した道を、単により洗練させていったものでしかない」⁶⁸⁾ともいえるが、顧客同士が直接音声で情

⁶⁷⁾ 第二次世界大戦後、長距離通信分野において電信は電話に、遠距離輸送分野において鉄道は自動車・飛行機に顧客を奪われて各々衰退産業へと転じた結果、事業内容そのものの見直し、不採算部門の整理による事業規模の縮小、企業統合を急速に進めざるをえず、その過程で従来保管してきた事業記録の類を大量に散逸・紛失あるいは廃棄したという事情がある。

⁶⁸⁾ Carolyn Marvin, *When Old Technologies Were New*, Oxford University Press, 1989, p.3 (吉見俊哉・水越伸・伊藤昌亮訳『古いメディアが新しかった時——19世紀末社会と電気テクノロジー——』新曜社、2003年、12頁)。

⁶⁵⁾ Philip. S. Foner, *Women and the American Labor Movement: From Colonial Times to the Eve of World War I*, The Free Press, pp.256-259.

⁶⁶⁾ Elizabeth B. Butler, *Women and the Trades: Pittsburgh, 1907-1908*, Arno Press, 1969 (reprint of 1909), p.337-338.

報交換する電話機の発明と普及によって電信が長距離通信の主役の座を追われたのも事実だ。通話距離の飛躍的な伸びに反比例して通話料金が下がり、またファクシミリのような新手の情報通信技術も進化を加速させるにつれて、最大手ウェスタン・ユニオンの取扱電報数は激減し、ついに2005年1月26日電信サービス廃止のやむなきに至る⁶⁹⁾。

こうして、電信事業が衰退し、電信というメディア自体が過去の遺物となるにともない、それを現場で支えた電信士の記憶も——記録も——後世の脳裏から消え去ったのだが、今回再現した物語には現代的な要素も含まれていた点にわれわれは留意すべきであろう。

モールス符号の習得によって新たな人生が拓けると知った若き女性たちが社立の訓練機関や単科大学に設けられた専門課程に入って電信士をめざす姿は、現在、情報系課程の置かれた高等教育機関に進んでプログラマーやシステム・エンジニアとして自立することを夢見る女子学生と重なりあう。やがてものにした技能に磨きをかけ、より良い処遇を求めて局から局へと渡り歩く女性電信士は、ジョブホッピングによって職業キャリアの向上をめざすワーキング・ガールズの原型とも捉えられる。

また、西部開拓地域の小さな鉄道駅舎で、電信機を操作して列車運行の安全性と円滑さを確保した女性電信士の働きは、こんにちの航空管制官(air traffic controller)が担う役割を彷彿させる。彼女たちは当時最新の運輸手段たる鉄道網の要衝に立ち、天候の変化や不意のトラブルから生ずる運行予定(diagram)の乱れを調整することによって、乗客の生命を守っていた。あるいは、女性電信士が家事・育児と電信業務との両立をはかろうと、電信装置一式を自

宅に移動させて仕事をこなす姿に、コンピュータ回線を使った在宅勤務(electronic commuters)の先駆を見て取ることもできよう。

女性電信士のなかからは、いわゆる立志伝中の人物は出なかったが⁷⁰⁾、ルイーザ・ヴォルカーの如く、進取の気性に富み、電信士という新奇な技術職に足を踏み入れた経験を土台にして、女性にとって未知の職業領域への挑戦を続けた者もいた。また、電信業務への女性進出に反感や疑念を抱く男性電信士たちと果敢な論争を繰り広げ、自らの職業的ステータスの向上を訴えた女性たちも多数存在した事実を忘れてはならない。

女性電信士の物語は、女性が19世紀欧米社会に根を下した「分けられた領域」規範の束縛からどのように脱却し、経済的な地位を高めていったのかという、より大きな史的枠組みのなかのささやかな一齣と定置できる。それはたしかに、メディア史や女性史のなかに埋もれた昨日の世界である。と同時に、それはわれわれの今日と明日にも連綿と連なる世界なのである。

⁷⁰⁾ U. S. スティール(U. S. Steel Corporation)の創設者カーネギー、あるいは発明王のトーマス・エジソン〔伝記としては、ニール・ボールドウィン著／椿正晴訳『エジソン——20世紀を発明した男——』三田出版会、1997年；名和小太郎『起業家エジソン——知的財産・システム・市場開発——』朝日選書、2001年〕、さらにはアメリカ電信電話会社(American Telephone & Telegraph Company)社長となったセオドア・ヴェイル〔伝記としては、Albert B. Paine, *In One Man's Life: Being Chapters from the Personal and Business Career of Theodore N. Vail*, Harper & Brothers, 1921；小松崎清介『ヴェイル——AT&T社長の椅子に2度座った男——』NECクリエイティブ、1993年〕が典型的な人物である。

⁶⁹⁾ 「米電信会社、150年以上に及ぶ電報サービスに幕」AP通信2006年2月2日〔hotwired.goo.ne.jp/news/20060207105.html/2006/03/24アクセス〕。